

コードギアス—反逆の  
ルルーシュ～ナイト・  
オブ・プライド

雪の日の猫鍋

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

エリアーでゼロがテロリストを、率いてブリタニアに反逆を始める数日前、空から騎士が降ってくる

その騎士の物語…

# 目次

零章

マテリアル設定

1

一章

敗北と新たな世界へ

4



## 零章

## マテリアル設定

アルフェリア・ペンドラゴン

性別 女性

年齢 推定17歳

誕生日 不明

血液型 A

家族関係 不明

好物 人 読書 動物 C・C。(友人として)

嫌物 差別する人間 戦闘

異世界のとある亡国にて守護騎士という国を護る役目を果たしていたが

最期は自身が他の敵と戦闘している際に国を滅ぼされてしまった

そのせいか、誰かを護ることに執着している節がある

ある時、時空の歪みに巻き込まれてギアス世界に来てしまったことがある

その際、コードを与えられたばかりのC・C.と共に数年過ごす

C・C・の死にたい、という願いができる前にC・C・を友人として愛し、心の支えとして過ごしたために今のC・C・の、願いは死にたい、ではなく、アルフェリアを自身のものにしたいという少し歪んだものになっているがそれに気づいていない

容姿は、F a t eシリーズの、アルトリア・ペンドラゴン・オルタ（槍）に近く、毛先にかけて少し蒼い銀髪に紫の瞳の少女

普段から表情にあまり変化はない

初対面の人間には、貴様、や貴女と呼び、話し方も、くくだろう、や、くくでしょう、など他人行儀なものとなる

ある程度親しいものには呼び捨てや、くくさん、くく君、などと呼び、話し方も、くくですか、や、くくですよ、など少し柔らかいものとなる

戦闘の際は、剣や、槍、ハルバートなどを使用する

自身のスピードを生かした戦闘スタイルと敵の攻撃をカウンターする戦闘スタイルを使い分けている

魔術は治癒、幻惑、氷、強化、防御、時間、加速系統が得意

火、水、風、土、闇、光などの属性系統はある程度しか使えない

ある程度と言っても他対一の戦闘においてかなりの効果を発揮する

苦手なものは、錬金、洗脳、支配、侵食などの今まで使っていなかったもの

しかし、人に使うことを嫌うために、滅多なことがない限りは使用しない

剣の名は、聖剣 ルシフェル、ガブリエル、ウリエルなど、天使の名を持つものや、魔剣 ベルゼブブ、グレモリーなど悪魔の名を持つものを所持している

槍の名は、聖槍 ティアマト、魔槍 セフィロトなどを所持している

各武器は普段は異空間にあり、使う際に呼び出す

聖剣系は、それぞれ目的に対して効果を発揮する物が多い

魔剣系は、それぞれある条件下で絶大な効果を発揮する物が多い

聖槍系は、環境によって強化される物が多い

魔槍系は、環境の他、時刻で効果が強化される物が多い

鎧は、2種類あり、白い鎧（アルトリア・ペンドラゴン（槍））と黒い鎧（アルトリア・

ペンドラゴン・オルタ（槍））のものと酷似したものである

## 一章

# ?? ～ 敗北と新たな世界へ ～

side 騎士???

ああ…負けたのか、私は…

視界が落ちて…落ちて…暗くなってゆく

体に力が入らない

剣を持つ力すらも

…私のは谷底へ落ちていく

護る国も無くなり…目の前の命すら守ることが出来ず…

…自身の命の火も消えてゆく

体が冷たく、凍りついたかのように…

ああ…情けない…守護者でありながら…守ることが出来ないなんて…

後悔ばかりが思い浮かんで消えてゆく

思い浮かぶのはあの時の平和な国、民衆の声で賑わう市場

騎士たちの鍛錬で響く声…



全てが私が護れなかったばかりに消えてしまった

……ああ……私でなければ護れたのでは無いか……？

……私ではなく、他の者ならば国を……

そんなことばかり考えてしまう

先程までいた戦場も、遙か上に……私は谷底へ落ちていく

……私に相応しい死に場所だな……誰にも看取られることなく誰にも知られることなく

消えていくとは

ああ……意識を保つことも出来なくなってきた……

このまま寝てしまおうか……それもいいのかもしれないな

落ちて……落ちて落ちて……私は消えた……

---

side 学生???

はあ……今日の授業も退屈だ

……早く終わらないものか

早くナナリーの、元へ行かなければならないのに

……授業が、終われば生徒会もある

はあ…

ふと、俺は窓の外を見る

いつものように青い空と小鳥が飛んでいるのが見える

眩しい太陽と白い流れ星……ん??

流れ星…だと!?

こんな昼間からか…?

俺は…自分の見間違いではないかと一度目を閉じもう一度見る

…流れ星は—ある

見間違いでは無いか

…何故こんな昼間から…??

「—ルージ…ランペルージ！」

「は、はいっ…なんでしよう、先生」

俺は慌てて返事をする

「この問題、解いてみる」

問題か…これなら…こうだな

「お、さすがだな、ランペルージ…正解だ」

ふう…この程度簡単だ

俺はクラスメイトからの視線を浴びながら自分の席に戻る  
…もう一度外を見て流れ星を探すが…無かった

side 学生(女)

はあ…ルルかつこいいなあ

でもなんで外見てたんだろう？

ん…？後で聞いてみようかな？

side 生徒会長

「何かしら、あれは—」

流れ星？…こんな昼間から？

でも面白そう…！

写真を撮ろうか

「えっと、確かここに…あつた…よし、これで」

カシャッ

私はその流れ星を撮影する

「どれどれ…あ、あれ？」

5枚撮影したが写っていたのは4枚目のみだった  
同じ場所を撮影したはずなのに…